

第27回名曲コンサート

PROGRAM

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー

Pyotr Il'yich Tchaikovsky

歌劇「エフゲニー・オネーギン」より ポロネーズ (約4分)

"Eugene Onegin" Polonaise

ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.35 ★ (約33分)

Violin Concerto in D major, op.35

第1楽章 アレグロ・モデラート Allegro moderato

第2楽章 カンツォネッタ:アンダンテ Canzonetta: Andante

第3楽章 フィナーレ:アレグロ・ヴィヴァーチッシモ Finale: Allegro vivacissimo

— 休憩 (20分) — Intermission

交響曲 第6番 口短調 op.74 「悲愴」 (約46分)

Symphony No.6 in B minor, op.74, "Pathétique"

第1楽章 アダージョ - アレグロ・ノン・トロツポ Adagio - Allegro non troppo

第2楽章 アレグロ・コン・グラツィア Allegro con grazia

第3楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ Allegro molto vivace

第4楽章 フィナーレ:アダージョ・ラメントーソ Finale: Adagio lamentoso

指揮: 簡 文彬 (チエン・ウェンピン) Chien Wen - Pin, Conductor

ヴァイオリン: 川久保 賜紀 Tamaki Kawakubo, Violin (★演奏曲)

管弦楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2013 2/16(土) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催: 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

3分ですぐわかる 今回の聴きどころ

ロシア的な色彩に溢れた協奏曲

今回の名曲コンサートはすべてがチャイコフスキーの作品によるもの。チャイコフスキーは19世紀末のロシアに生きたが、当時はロシアに根付く音楽を重視するロシア五人組が活躍をしていた。チャイコフスキーは彼らとは少し違う道を歩み、ドイツ音楽に近い要素をロシア音楽の中に持ち込んだ。しかし、チャイコフスキーの音楽の中にも豊かなロシアが息づいている。それを実感出来るのがヴァイオリン協奏曲である。特に第2楽章の美しい旋律、そして第3楽章の生き活きとしたリズムはロシア的なもの。その前に演奏される「ポロネーズ」にもチャイコフスキーらしい華やかな色彩感が感じられる。ヴァイオリン協奏曲はテクニク的にも難しく、ヴァイオリニストにとって挑戦のしがいがある。

アイデア豊富で、驚きに満ちた交響曲

後半は交響曲第6番「悲愴」。チャイコフスキーの名作というだけでなく、歴史的に見ても独創的な交響曲である。第4楽章は、通常の交響曲のようなテンポの速い楽章ではなく、たっぷりとしたテンポによる深みのある音楽が展開されている。第2楽章の舞曲も4分の5拍子という変拍子。そのリズムはロシア的なもので、第3楽章などにもロシア的なメロディが登場する。西欧志向と言われたチャイコフスキーだが、その心の中にはロシアが深く根付いていたと思う。その心を感じながら「悲愴」を聴いてみたい。

片桐 卓也(音楽ライター)

Memo

オリン、ハンス・リヒター指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団によって行われたが、初演時の評価はさんざんだった。その後プロツキーが何度も演奏することで、次第に評価を獲得していった。

第1楽章 アレグロ・モデラート～モデラート・アッサイ ニ長調 ソナタ形式

オーケストラの第1ヴァイオリンのみの序奏部に始まり、独奏ヴァイオリンがカデンツァ風に入ってくる。豊かな旋律に満ちた第1主題、叙情的な第2主題、いずれも独奏ヴァイオリンが奏でる。

第2楽章 カンツォネッタ・アンダンテ ト短調 複合3部形式

ロシア的な叙情性をたたえた美しい主題による楽章。そのまま切れ目無く第3楽章に繋がる。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチッシモ ニ長調 ロンド・ソナタ形式

活発なリズムを持つトレパークというロシア舞曲による主題で、熱狂的な音楽。最後まで情熱が切れる事なく続いて行く。

チャイコフスキー:交響曲 第6番 口短調 op.74 「悲愴」

人生そのものを描いたと言われる最後の作品

チャイコフスキーが人生の最後に書いた交響曲が第6番「悲愴」である。チャイコフスキーが交響曲に取り組み始めたのは、サンクトペテルブルクからモスクワに移った時期。ニコライ・ルビンシテインが1866年に創設したモスクワ音楽院に誘われたチャイコフスキーはモスクワで生活を始めた。音楽院が始まる前の余裕のある時間に、交響曲第1番を書き始めた。その後、1888年までに5曲の交響曲を書き上げた。アメリカのカーネギーホールの前で指揮をするなど、欧米で積極的に活躍した数年を経て、1893年に交響曲第6番「悲愴」を書いた。

同年10月にサンクトペテルブルクでこの交響曲は初演されたが、その9日後にチャイコフスキーはコレラと肺水腫で急死してしまった。交響曲の初演後の突然の死に関しては、チャイコフスキー死後に様々な理由が語られてきたが、現在では生水を飲んだことによるコレラへの感染が最も有力な理由とされている。また「悲愴」のサブタイトルはチャイコフスキー自身が出版社に提案したものである。雄大な作品で、特に第1楽章冒頭の序奏部と第4楽章はゆったりしたテンポだが、19世紀末の交響曲として、これはかなり独創的だ。チャイコフスキー自身はこの作品が自分の最も優れた作品だ、と自負していた。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・ノン・トロppo 口短調 ソナタ形式

ファゴットによる重々しい音楽に始まる序奏部。これはヴィオラとチェロによる第1主題を予告するものだ。アダージョの序奏部が終わると、弦楽器による第1主題が始まる。そして一度大きく盛り上がった後に、ロシア的な主題による第2主題部が始まる。この部分は3部形式となる主題部で、異例の長さだ。その後激しい展開部が始まる。再現部もその激しさを引き継いで行く。そしてやがて第2主題が高らかに歌われた後、静かに終わる。

第2楽章 アレグロ・コン・グラツィア ニ長調 複合3部形式

4分の5拍子という変拍子による優雅な音楽。ロシアにはこの4分の5拍子を使った民俗舞曲が数多くあるという。中間部は口短調となり、少し暗さを感じさせる。

第3楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ ト長調

沸き立つような8分の12拍子のリズムの中から4分の4拍子の行進曲風音楽が登場してくる。スケルツォ楽章にあたるが、内容は次々に変化していく。

第4楽章 フィナーレ アダージョ・ラメントーソ 口短調 複合3部形式とソナタ形式の組み合わせ

全体に落ち着いたテンポの中で展開される深い感情に満ちた楽章。次第に情熱を増して行く音楽は、中間部で最も高まるが、次第に静まり、最後には消えるように終わる。